

## ニュー・ジランド再訪……長引いたブラック・アウト

森 宏

## はじめに

「リフト（エレベーターのこと）の利用はあなた達のリスクよ」マリアンヌ（学科の事務主任）は廊下の通りすがりそんな事を言い、ドリンは何かませかえし2人はどっと笑ったが、私には何の事だかよくわからない。1998年2月中旬、NZのオークランド大学（国際ビジネス学科）に押しかけ、最初の日に共同研究者のドリン・チャディーの研究室でそれからの仕事の進め方を打ち合せていた時の事である。

ニュー・ジランドには1991年から92年にかけて、ほぼ1年間と1994年の冬（日本の夏）に約2ヶ月生活したが、キュウィー\* 英語はロンドンの下町ナマリに近く、日常の短い会話は聞きとれないことが多い（\*NZの羽なしの鳥、ニュー・ジランド人の愛称としても使われる）。どこかで書いたことがあるが、自分の仕事に関係した論理的な話やニュースなどは余り支障なく

## 目 次

はじめに	1
オークランド市CBD（中心部）の長引いた停電	2
送電線パンク（“Failure”）の技術的細部	4
ブラック・アウトに至った「本当の」理由	8
ニュー・ジランド 変わったこと	13
補稿「技術進歩における美と蓄積の比重」	16
1 ヨーロッパにおける蓄積の厚さ	16
2 英国人（≒日本人）の物の考え方と技術進歩	17
3 「意志決定における美」と蓄積と技術進歩	19
〈編集後記〉	20

フォローできるのだが、前後関係のはっきりしない2言、3言が一番むづかしい。

後で、ドリンに問い質すと、前日だかに全市的な「クーラーの使い過ぎ」で停電になり、経営学部の入っているビルのエレベータがとまって、なかにいた人達は長時間とじこめられ、ようやく天井をこじあけて這い上ったとかの事であった。そういう事はいつでも、どこでも起り得ることなので別に気にもとめず、当てがわれた研究室に戻り、持って来た資料の整理にとりかかっていると、程なくパタッと電気が止まった。窓の広い明るい部屋なのでブラインドを調節してそのまま仕事を続けていたが、全員直ちに建物の外に出るようにとの御触れである。当然リフトは使えないので階段伝いに下に降りる。

当分（恐らく1週間くらいの感じ）電気はこないであろうが、明朝8時から8時半迄建物をあけるので、その間に来て必要な荷物を運び出すようにとのお達しであった。それでも私は事の重大さに気付いていなかった。エアコンがとまっても、日本の夏に比べるとはるかにしのぎやすい（借りていたアパートはクーラーがなくとも全く快適であった）、ブラインドをあげると採光は申し分ない。幸か不幸か私自身コンピューターは使えないから、電気がこなくともデータの整理や簡単な計算は電卓でできる。そんな感であった。

翌朝大学に行くと、「8時半には全員建物を退去しなければならない。今後1週間は何人も建物のなかに入ることは許されない」「大学はむこう1週間クローズされる」は文字通り物理的な閉鎖であり、勿論学科の電話もfaxも使えない。

「何が幸いするかわからない」は私の最近の処世訓である。7年前に北島の南部のパーマストン・ノースのマッシー大学に1年間お世話になった時、知り合った親しい友人達はその地区に幾人か居る。94年冬にオークランドに滞在した折は時間的な余裕がなく彼らを訪ねることが出来ず、心残りであった。思いもしなかったいいチャンスとばかり、翌朝早くオークランドを発って南に向けてドライブすることになった。

往復の途中みたニュー・ジラントはここ数年驚くべき変りようで、それらについては、本稿の終りの方でふれることにし、次節以降では、もっぱら同国の変わらなさ、すなわち放牧地の羊にも似たのんびりさについて、今回の停電への対応に例をとって述べてみたい。意識的に多少技術的な細部に立ち入るが、日本だったらどうしたであろうかについて専門家からの反応を期待しているからである。

## オークランド市CBD（中心部）の長引いた停電

韓国のソウル経由でニュー・ジラント北島のオークランドに着いたのは、筆者の手帳では2月16日。後に新聞が報ずる停電騒ぎの発生時点からすると、2月18日か19日でないとうまく整合しないのだが、年を取るとぼっかり記憶に穴があくものである。それはともかく、空港には

ドリンが迎えにきてくれ、途中でかれがあらかじめ手配していた格安のレントカー会社で、恐らく7～8年ものトヨタのカローラを借りた（ニュー・ジランドは日本の中古車の最大の輸入国とか）。その後、大学から車で10～15分程のパネル地区のアパートに落ち着いた。

入り海を見渡せる広々した1LDKで、家具・什器付、光熱費込みで1週間NZドル\*で\$270であった（\*当時1ドル73円前後）。持ち主が仕事の関係で北島の中央部のロウトルアにしている間、誰か安心して預けられる人という御眼鏡にかない、しかも互いの期間的条件が合致していた。ドリンの奥さん（ダナ）が八方手をつくして見付けてくれた格好の物件であった。なお本稿との関連で言えば、この地区はCBD（セントラル・ビジネス・ディストリクト）とは道路1つへだてた別の配電地域にあったため、今回の停電騒ぎにはまきこまれることなく、生活の面では全く不自由しなかった。大学のすぐ前に素適なアパートがあったのだそうだが、そこを選んでいたら恐らくニュー・ジランドに返まることは出来なかったに違いない。

オークランド市には上述のように1994年に2ヶ月近く住んだことがあるので家内も私も一応の土地勘はあり、着いたその日の内にビール・ワインを含め（これがないと1日ももたない）日常生活に必要な買物はすませ、翌朝\*から大学に出かけていった（\*もしかすると2～3日ぐずぐずしていたのかもしれない。そこいらの事が思い出せない）。上記のマリアヌヌから研究室の鍵や建物に入るカードをもらい受け、午後からドリンの研究室で打ち合せという運びであった。

同年の夏（日本の冬）はオークランド市周辺は異常な暑さ続きで、2ヶ月近くも降雨がなかったとのことである。かつて住んでいた北島の南の方は真夏でも明け方は気温が10度C前後に下り、昼間でも汗になる日は殆どなかった。オークランド市はそこより5度くらい緯度が高い（赤道に近い）から、夏冬とも気温は幾分高いのであろうが、一般の住宅ではクーラーを備えているところは少ない。

そう言えば、パーマストン・ノースで正月1日（幾度も繰り返すが南半球では真夏）に市営プールに行ったことがある。50mの屋外プールは夏でも加温しているのだが客はわれわれ2人きりで、帰りがけ受付の女の子に「クライジー」と言われて聞きとれずにポカンとしていると、家内から「彼女の言う通り私達は本当に“クレイジー（crazy）”なのよ」と言われたことを思い出す。あの年はあの地方は異常に雨が多く、気温も低く、われわれは（夏に）暑さを求めてニュー・カレドニアに行った程だが、北島も最北端が豪州のシドニーやキャンベラと同じ緯度で、さらに海にかこまれているから通常の年は夏冬とも気候は温和である。

だがその年の夏（1998年1～2月）は例外的に暑く、窓の開閉が自由でない市内の近代的ビルは、クーラーをじゃんじゃん使用した。また上述のように雨がなかった。市の中心部（CBD）に送電する送電線は地下埋設（あとで図示）のため、乾いて温度の高い土壌は送電に

伴う発熱を吸収することが出来なかった（のだそうである）。かくして送電線が「いかれ」（新聞にのった英語の表現では、“the cables failed”）、地下埋設だから、断線個所の発見が容易でなかった。ようやく幾ヶ所か治しても、他にも具合の悪いところがあるらしく十分な量の送電が出来ず、結局中心部までの10km近くにわたって、ポールを建て、空中送電線を新設することになった。私がオークランド大学で仕事を始めたのが2月20日（金）で、電気が朝・昼通して来るようになったのは、（私の手帳によると）確か3月30日（月）である。

終日完全停電の期間が2週間強、その間大学は当初の予定の1週間が2週間に延長されて完全休校（というより閉鎖）。その後送電線が1部修復され、また発電機や別の地区からの応急配電もあって、CBDに電気が戻るようになったが、大学のある地区は“AM ZONE”に指定され、送電は午前7:00時からきっかり正午迄で、遅くとも12時半迄には建物を出なければならなかった。こうした時間配電の期間がかれこれ1ヶ月近く続き、正常に復帰したのは3月末であった。

最初の2週間は病院と自家発電の設備を手当てした一部のホテルなどを除くと、目抜き通りの交通信号を含め、オークランド市のCBDは完全な“ブラック・アウト”であった。CBD自体は面積的には幅4～5km×奥行き2km程度のごく狭い地域だが、ニュー・ジランドのGDP（国民総生産）の5%前後を生産し、輸出入にたよるニュー・ジランドの北の主要な窓口であるオークランド港はその間機能停止であった。

電気がとまれば業務用の冷蔵・冷凍庫も働かなくなる。輸出用の肉や魚、それにバター・チーズなどの酪農製品もいたむだろう。オークランド市の中心部にはいいレストランや中華料理店も多いのだが、電気が戻った後も何となく不安で寄り付く気がしなかった。市の中心部の土産物店で昼からローソクの灯りで細々と商売しているところもあったが、観光を売り物にしているニュー・ジランドのイメージ低下は相当なものであったに違いない。

### 送電線パンク（“Failure”）の技術的細部

オークランド市の中心部に通ずる高圧線（110KV）が最初にいかれた（“fail”）のは（1998年）1月22日のことである（その2日前にもガス入りの送電線の1本に負荷がかかりすぎ——通常の30MVAから53MVA——1時的に不通になったといわれる。3月17日付 NZ HERALD 掲載のNick Perry Reports）。

送電線は通常必要量の2倍以上の能力をもたせるようになっているそうで（前掲Perry Reports；NZ HERALD, News Review A15, Feb 28 など）、たとえ1本が不通になっても、もう1本残っていれば、当面はそれで間に合う計算である。オークランド市のCBDへの送電線（ケーブル）は全部で4本あったので、その1本がきれても別にあわてふためくことは



ない。2本目のケーブルがいかれたのは、それから間もない2月9日である。残りの2本は通常の30MVAに比し50からマキシマム60MVAの負荷になった。市内中心部の利用者は、エアコンの設定温度を上げる、ブラインドをとじて太陽熱を遮断する、リフトの利用はなるべく控えるなど、節電に努めるよう警告を発せられた。

パンクしたのは4本のケーブルのうち2本だから、まだあわてるには及ばない（ということで、まだこの段階ではどこに異常が生じたかの探索は始められてなかったようである）。しかし異常な暑さは続く、近代的な高層ビルでエレベーターを使わない訳にはいかないなどの理由で市中の電力消費は落ちず、3本目のケーブルは10日後の2月19日に51MVAの負荷にたえず、いかれてしまう。電力会社の技術者達は4本目のケーブルの負荷を70MVA以下におさえるよう指示するが、翌日（2月20日）の夕刻61MVAであえなく不通になる（同上Perry Reports）。以上がオークランド市CBDのブラック・アウトに至る経緯である。

オークランド市のCBDへ通ずる地下送電線は第2次大戦終了後間もなく、1950年代に延長10kmにわたりペヤで埋設され、1970年代にさらに2本が場所をかえて追加された。従って古いペヤはすでに50年近く経っている。よくそれだけのものを半世紀も前に設置して今迄何事もなかったと、先見性と耐久性に敬意を表すべきか、よくもそんな古いもので間にあってい

図1 地下ケーブル掘り起こしの現場

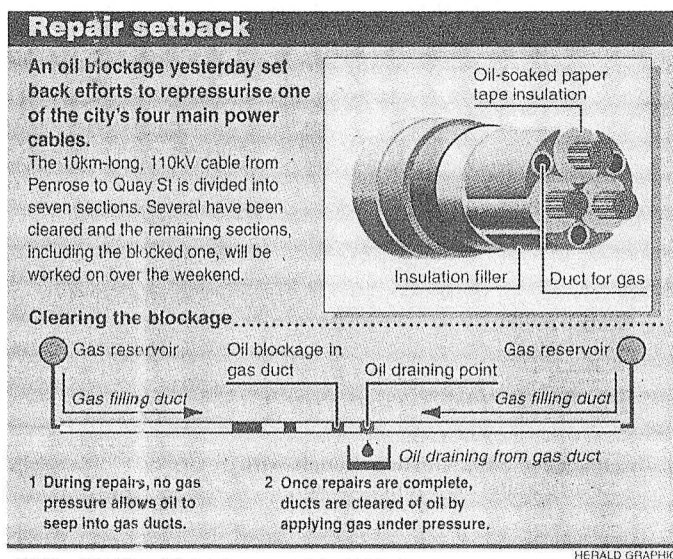


出所：SUNDAY STAR - TIMES, March 1, 1998



出所：BUSINESS HERALD, March 7, 1998

図2 ガス・ケーブルの断面図



出所：NZ Herald, February 28, 1998 A5

たと経済・社会の停滞性に驚くべきか、恐らくその両方なのだろう。

ケーブルの老朽化は相当以前から関係者の間で問題にされていたようである。しかしどうせ新しくするのなら“100年以上先のオークランド市の重要部分のニーズをまかなえるよう” (Business Herald, March 10, D3) 共用の地下溝を設けてそこに入れた方がよいということになり、トンネル掘りの費用や補償の問題などで先送りされてきた。どこかの国のように何事もおやすく始め、具合が悪くなると（もしかすると悪くなくとも年度内の予算消化のためかもしれないが）安直にあちこち掘り返して交通渋滞を引き起すのとは対照的である。

一般に西欧の諸都市の街造りは少くとも数十年のタイム・スパンで行われているようにみえる。1971年に経済企画庁のスポンサーで欧米諸国の先端的農業を視察した帰路立ち寄ったホノルルで、旧友ラリー・ビヤーズ氏の奥さんのハルミさんはこう言ったものである。「私は主人についてアメリカのあちこちを移り住んだけど、ハワイくらい道が悪く、いつもあちこち掘り起しているところはほかにしらない。ここがこんなに悪いのは昔から日本人が多く住んでつくったところだからでしょう」と（巻末「技術進歩における美と蓄積の比重」参考）。

話をいかれた高圧線に戻すと、ケーブルの地下埋設の姿は、事件後（それも4本全部駄目になってから）断線箇所を見付けるためシャベルで掘り起している写真（図1）から想像されるようなものである。またケーブルの断面図は図2の写真のようで、放熱などのためのガス\*のダクトがつまって断線に至ったと考えられている（\*より技術的には、古い方の高圧線は“gas-filled”、1970年代に設置されたのは“oil-filled”である。古い“ガス・ケーブル”の方が先にいかれた。本稿では「ガス」と「オイル」の功罪についてはふれない）。

ケーブルを掘り起し、ガスもれないしオイルもれで不通になった箇所を発見し、断線部分を補修（joint）する。そのための技術者は実はニュー・ジランドにおらず、事件後急遽オーストラリアから呼び寄せられた（NZ Herald, Feb. 24, A11他）。1 地方会社に常時そうした要

員がいないというのはわかるが、いくら人口300万人強の小国とは言え、ニュー・ジランドに1人もいないというのは信じ難い話である。それはともかく図1の写真にみるような電線4本で、よくもオークランドのCBD（東京で言えば千代田・中央・港の3区に当る）の電力需要が賅われていたものだなーとの感が拭えない。

先に高圧線は通常需要の2倍を賅えるように設計されていると書いたが、オークランド市の場合近年はその要件が満されていなかったとする見方がある。オークランド市への電力供給は長くオークランド電力公社（Auckland Electric Power Board）の手でなされていたが、ニュー・ジランドの他の多くの事業同様、1992年に現在のマーキュリー電力に民営化された。民営に移される直前の92年12月、将来の電力供給に関する報告が出されていた。

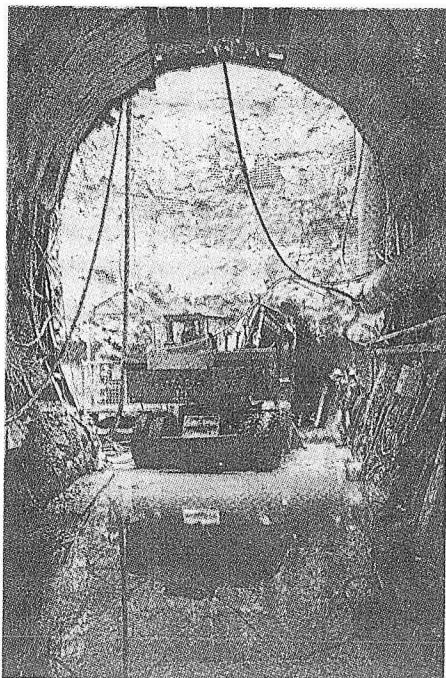
「中期的に、オークランド市、特に中心部の電力需要が増加し、供給の強化が必要なことは確かだが、いかなる需要予測にあるように、需要の伸びには強気と弱気の見方がある。前者は1996年迄に供給力を倍加させる、後者は1999年までに強化をおわらせる、そしてもっとも「現実的なシナリオ」として、1997年迄に主としてCBDの全必要をみたくべく、110KVのケーブルを2本新しく加えるのが望ましい」というものであった（SUNDAY STAR TIMES, March 1, 1998）。

この予測が行われた1990～92年当時、ニュー・ジランド経済は87年の株式市場の崩壊後のかつてないスランプの時期にあり、特に、商業都市オークランドの沈滞はひどかった。都心のオフィス・ビルには空室が目立ち、そこで働く人達の数ははっきりと減少していた。このような経済の実勢を受けて、将来予測は中期的とはいえ、しめり勝ちであったのは止むをえないことであった。

しかしその後、実際にはニュー・ジランド経済は、民活を中心とする競争政策（日本の新聞でもしばしば取り上げられた）が効を奏したのか、何人も予想しなかったペースで拡大した。電力消費の重要な担い手があるアパートの数は、中心部（inner city）で1997年迄に1992年比358%もふえた（4.5倍になった）。1996年だけでも、1992年に存在していた数以上の新しいアパートがつくられた。CBDのオフィス・スペースの占有面積は、1992年から1997年の間に50%増加した。都心部に新しく建てられるビルは一般に背が高く、古い建物に比べエレベーターの依存度は高く、また既述のように窓があかないからエヤコンの利用は止めようがない（同上SUNDAY, March 1）。

新しいケーブルを2本追加するという計画はその後、従来のように土中に埋めるのではなく中心部迄地下溝（トンネル）をほって、その中に設置し、より管理しやすくするという案に代った。しかし1997年迄に会社（Mercury Energy）は、資源管理法（the Resource Management Act\*）のもとで必要とされる関係機関の許可と、トンネルの地表部の地主達との間で満足す

図3 共用地下トンネルの削掘現場



出所：BUSINESS HERALD, March 10, 1998 D1

の何とか持ちこたえ、1998年の夏に至ったという訳である。

### ブラック・アウトに至った「本当の」理由

停電の翌朝早くオークランド市を後にし、南へ向った。オークランド市と北島の最南端の首都ウェリントン市をつなぐ幹線1号線は、随所に数百メートルの追い越し車線を設けている——従ってそこは3車線——ものの、基本的には片側一車線づつというのも情けない話である。前日の夜、電話でホテルの予約をたのんだマッシー大学のエヴェリンは、「私なら6時間で十分」と言ったが、パーマストン・ノースの近くに来て、知っているつもりで脇道に入ったのが裏目に出て宿に落ちついたのは、6時に近かった。

南半球でも「太陽は東から昇り西に沈む」<sup>11</sup>のだが、太陽との関連で北に進んでいるのか南に進んでいるのかの判断を間違ふことが多い。私の記憶の地図ではマッシー大学は市の上の方

注：1992年8月1年間のNZ滞任を終え帰路英国に立ち寄った。寒かったNZと対照的に、その年のロンドンには異常に暑かった。小さな集りで私は「NZは何でも反対。季節が逆だけでなく地図も南が上。掛け時計も左廻りだし、太陽も西から出て東に沈む」と、愚息Sの友人達を煙りにまいた。その折1人だけ笑いを堪えていたのが、孫娘Eの母親である。

べき契約を結ぶことができなかった（\*同法は環境にやさしい法；the Environmentally - Friendly Actとして1991年に設定された。会社側は、この法律がなければとくにトンネルを完成することができた筈と主張するが、それは言い逃れにすぎないという見方もある。筆者は後者の見方に与したい。BUSINESS HERALD, March 10, 1998, D3）。

なおトンネル掘削の認可は1996年6月にオークランド市（City Council）からおり、実際の建設は1997年5月にはじまった。トンネルの実際は図3の写真にみるようなもので、先に示した地中埋設の実態とは比べものにならない程大がかりのものである。トンネルの完成は1999年末と予定されている。

そうこうしながら、古い4本のケーブルのまま、何回かのオーバーヒートなどはあったもの

(北半球の常識では北の方) にあり、私が脇道をしたフィールディングは下の方 (同じく南の方) にあったのだが、実際は丁度反対なのである。従ってお陽さま目当てに標識のない田舎道を通ると、有らぬ処へいってしまう。オーストラリアのクインズランド州で、行けども行けども海岸に出なくて弱ったことがある。東でなく西の内陸部に向っていたのである。

エヴェリンが経営してくれたタイ料理の店には、彼女の御主人のボブと、かつてマッシー大学で研究室が隣だったタウンスリーが来てくれていた。彼は飛切り気のいい人で、週末にはよくパブにさそってくれたり、私が論文を書いている時など、英語の表現で何かと面倒をみてくれた。いい年なのに「大人」になりきれないところがあり、オランダ人のガールフレンドWとは、しょっちゅうもめていた。エヴェリンは「ロバートはとてもしい人だけど、あれは彼が悪い」と言っていた。しかし「稚気愛すべし」で、私はそんな彼が気に入っていた。

はじめはビール、次はエヴェリンが私の好み覚えていて持ち込んだ\* ワインでワイワイやっている内に、話はおのずと昨日のオークランドの停電騒ぎになる (\*ニュー・ジランドもオーストラリアもBYO - Bring Your Own (Bottle) - の店が多く、僅かな「コルク代」(Corkage) で持ち込んだ酒をのませてくれる)。予想されたことだが、大学の先生達は「ブラック・アウトを招いた主因は無理な民営化 (privatisation) にある」と言う。かれら自身、行革の嵐のなかで予算をカットされる、組織がえを強行される (エヴェリンの所属していた農業経営学科は廃止)、タウンスリーに至っては体のいい首切り (勧奨退職?) にあっている。「民営化に伴う利潤一点張りのやり方で、設備の維持管理が十分にできなかったから起るべくして起った」という。

しかし「本当の」民営化なら、適切な維持管理を怠るとかえって高く付き、利潤は少なくなる。事実、長引いた停電で影響を受けた市中の商店や企業は、マーキュリー電力に少なからぬ補償を求めている。国営や市営であればその財源は他に求めることができようが、私企業の場合には利潤に喰いこまざるをえない。また私企業ならば臨機応変に対応できるが、公企業の場合は法規や予算にしばられ、なかなか必要な修復作業もやりにくい。私はだから、民営化が直ちにブラック・アウトを招いたとは考えない。

しかし6年振りの再会である。そんな議論でせつかくの一夜を台無しにしたくない。ボブは法律の専門家だし、エヴェリンは組織論に強い。しかもタウンスリーは行革の犠牲者で「毎日が日曜日」を強いられている。私はあえて自分を主張しなかった。その時はまだ自分の考えがそれ程明確にかたまっていなかったのだが、「問題の核心は公企業か民営かではなく、ニュー・ジランド人そのもの、ないしその生き方にあるのではないか」と感じていた。

パーマストン・ノースに2泊、さらに100km南下してウェリントンに一泊。その晩はエヴェリンのすすめてくれた「サウス オブ ザ ボーダー」なる店でラテン音楽をたのしみ、途中の

田舎まちで一寸したアンティークのコーヒー・カップなどを求めて5日振りにオークランドに戻った。大学はその週1週間は休みでも市中は、ほぼ正常に戻っているかと思いきや、目抜きクイン・ストリートとビクトリア・ストリートの交差点も信号機がともらず、警官が手ばたで整理している始末である。発電機を手当てできた大手のホテルは何とか営業している様子であったが、外からみるロビーは暗く、リフトが動いているかどうか定かでなかった。客足のとだえた土産物店で昼間からろうそくの灯がともっているのは、いかにも先進国の最大の商業都市の光景とは言い難かった。

ドリンに連絡すると、「どうしてこんなに早く帰ってきた。ところでケアンズに行ったことがあるか。とてもいいところで、キュウイーは随分知っているよ」と言う。オーストラリアのケアンズは、1995年の冬（日本の夏）クインズランド大学に2ヶ月間客員研究員でいった折、乗り継ぎでもないのに無理やりに空港におろされた不愉快な思い出が残っている。極寒から常夏のビーチに飛ぶのはいかにも魅力的だが、現在のオークランドは「エルニーニョ」による(?)酷暑の最中である。それにオークランドには仕事をしに来たので、遊びに来た訳ではない。来る前に院生のI君をわずらわし入力した20年分の『家計調査』の世帯消費データを、世帯員個々の年齢別に分解し、ドリンの持つパレモアーのコウホート・モデルにかけてもらわねばならない。

ドリンの自宅にはコンピューターがあり、郊外だから今回の停電は免れている。大学の研究室が駄目なら、差し当りドリンのうちの書斎で仕事を始めたい。しかし彼はどうした事か余り乗り気でない。私が持って来た分析プログラムが、こちらでは「もう誰も使っていない」Q BASICだから、大学の再開を待ってコンピューターセンターの専門家に使えるようにしてもらわなければならない。しかも（九大の川口教授の書かれた「2次計画法」の）プログラムは、ところどころHENKAN（変換）とかGYOSAGASHI（行探し）などローマ字の日本語が使われていて、判読がほとんど不可能である。だから「ケアンズに1週間くらい行ってこい」というのである。

ドリンはモーリシャス出身のカナダ人で、つねづねニュー・ジランドの「のろさ」や「非効率性」には批判的である。共同研究で合意したはずなのに、私の方法論に興味を示さない。計算のためのアルバイトの手配にも殆ど力を貸してくれない。ドリンの今回の不熱心さというか消極的な態度は、ミステリーであった。大学当局の処遇に対する不満が爆発寸前に達していたのは確かなようだが、それと私との共同研究は全く別物である。憶測するに、私の持ってきたプログラムで分析を進めれば、かれがこれ迄やってきて、もう九分通り出来上っている仕事に花をそえるというより、完全に否定することになりかねないことを感じとっていたからかもしれない。



学術雑誌に論文を投稿した時、似たようなことが起こる。査読者には同じ領域の人が選ばれるのが普通だが、当該論文が権力（著名な経済学者のモデルないしむつかしい数学）を借りることなく、しかも誰にもわかるやさしい方法論で、その人（達）のこれ迄やってきた事の否定につながるような内容だと、「この手の論文は学術論文とはみなしがたい。直ちに棄却（outright rejection）」となることがある。こうなると別の査読者が好意的な評価をしても、浮べられない。こういう事で悔しい思いをしたことが幾度かある。その論文が一流雑誌に出ることにより、かれらのこれ迄の研究プロジェクトの評価が下り、国なり州の補助金のカットにつながるような場合、査読者はきわめて陰湿になる。

当てにしたドリンがそうなら自分で何とかしなければならない。幸い日本ハムのニュー・ジランドの責任者の日高氏の奥様から、「こちらで日本人のお子さん達にコンピューターを教えている方がいらっしゃる」との情報をえ、郊外でコンピューターのソフトをやっておられる山田氏御夫妻をおたずねし、協力を依頼することになった。山田氏もはじめは「このプログラムはここでは動かない」と悲観的だったが、日本の私の共同研究者達とE-mailでやりとりし、補助的なパッケージを送ってもらい、計算できるようにして下さった。

手帳を手繰ると、山田氏の事務所には3月2日から隔日にお邪魔している。はじめはプログラムの修復、動くようになってからはもっぱら奥様がデータを入力し、計算をして下さった。すでに書いたが、大学は当初2月23日（月）からはじまる1週が閉鎖で、3月2日（月）からはじまる予定だったが、電力の回復がおくれたため、次の週にも閉鎖が継続された。午前中配電地区（AM ZONE）に指定され、午前中のみ登校が可能になったのは、停電が起ってから16日目の3月9日（月）からであった。

3月8日付のSUNDAY STAR-TIMESに出た事故記録によると、事件後5日目にオーストラリアのメルボルンから6台のポータブルの発電機が到着。その後、幾台か追加されて、10日目の3月2日に30%が回復、3月4日に第1ケーブルが修復されて40%の電力。3月5日、修理したはずの2本のケーブルはテストに不合格。やむなく1999年末にトンネルが完成する迄、電柱をたてて臨時の空中ケーブルの設置にふみきらざるをえなくなる。

かくしてオークランドのCBDへ完全に電力が戻り、大学も夕方迄完全開校されたのは、筆者の手帳によると、事件後1ヶ月以上たった3月30日からである（もしかすると前の週からだったかもしれない。いずれにせよ、2～3日、あるいはせいぜい1週間でなく、1ヶ月前後かかったことを指摘したい）。新聞報道によると、電柱\*をたてて架線を引くと、その沿線の住宅の価値は5%から30%も下るといふ（\*高さ18メートル）。電線が通る地区の3ベッドルームの標準的な住宅の価格は35万（NZ）ドルをこえるだろうから、住宅所有者にとっては、平均5万ドル近い資産の減価につながる（NZ HERALD, February 28, A5）。補償問題がいかに解

決されたかフォローしていないが、マーキュリー電力にとって、いろいろ高いものについての事だけは確かであろう。

例によってあちこち脱線した。そろそろ話を落さねばならない。次に紹介するのは、3月1日のSUNDAY STAR-TIMES, NEWS 7にのったマーキュリー電力の責任者 (chief executive)、Wayne Gilbert氏との会見記である。「ギルバート氏が事故 (the crisis) を知ったのは、金曜日のディナー・パーティーに向う車中であつた。“私が携帯電話に配電所の責任者から、4本目のケーブルが駄目になった (gone down) との知らせを受けたのは、素適な外での夕食 (a nice evening out) をたのしみにしていた時であつた。私は真直ぐ配電センターにかけつけ、タクシーの運転手に待つように言った。20分そこらで終るだろうが、もしそれより長くかかるときは、別の仕事に行った方がいいかもしれないよと”」

「マーキュリー電力に対する世間の非難は不当にきびしい。ビジネスで1日の終わりに、やることはやり、間違いはおかしていないと自信を持てれば、あなたに出来ることは余りない。何か最悪の調査で、誰かが判断の誤りをおかしたという結果が出るかもしれないが、これ迄のところは、そのしるしはでていない。(中略) 私は清心な良心を持っていて、天に恥ずることはない云々」

はじめに記したように、4本のケーブルの最初の1本は1月22日に駄目になり、2本目は、2月9日にいかれている。その年の夏はエルニーニョか何かはしらないが、オークランド地方は例年にない暑さで、雨も少なくケーブルをカバーする土中温度は高まっていた。他方電力需

図4 ケーブルの切断箇所の修理



出所：NZ Herald, News Review, February 24, 1998

要は例年以上に強いとすれば、危機は少くともはじめの1本が切れた時に認識できたというより認識すべきではなかったか。ギルバート氏やその他の関係者は、「あと知恵はいつでも正しい」と世間の非難をかわずが、上記SUNDAY紙 (同日) によると、氏は、オーストラリアの南東クインズランド電力公社の最高責任者を17年間つとめた後、1994年4月にマーキュリー電力にむかえられ、その時のサラリーは、45万ドルとのことである。

2本目が切れた時も抜本的な対策はとらず、2月19日 (木) に3本目が切れたにも拘らず、その翌日の夕方、“a nice evening out”をたのしみにしてパーティー会場に向うという



のは、少くとも私の感覚からすると正常とは思えない。

掘り出したケーブルの不良箇所の修理を担当したのは、オーストラリア電力（Energy Australia）のボブ・スティンソン氏だが（図4参照）、彼はギルバート氏のかつての部下で、4本目がいかれた後ようやく連絡をとって来てもらったという報道もある。そうした措置は少くとも1ヶ月前にとられるべきではなかったのか。これは民営化で利潤一点ばかりになっていた云々の議論とは、おのずと違った次元の話である。

ニュー・ジラントの人達は当然私よりは英語がよく読めるはずである。主に大学関係者としか話し合っていないが、例えば国際ビジネス学科の10時や3時のコーヒー・ブレイクの際のおしゃべりで、上に引用したギルバート氏の「a nice evening out」をたのしみにしていた」ことに憤激する人はいなかったのである。

### ニュー・ジラント 変わったこと

“OPEN 7 DAYS”の店が各地でずい分ふえた。先にも書いたが私共夫婦は1991年から92年にかけてほぼ1年間（その時はマッシー大学のある中都市パーマストン・ノース）と、94年の冬約2ヶ月近く（その時はオークランド）それぞれニュー・ジラントで生活した。

「どどここの海岸がいい」「どどここの町はなかなか風情があってみるに値する」などといわれて週末ドライブに出掛けたものだが、店はどこもあいておらず、絵はがきも買えないばかりか、完全にひもじい思いをして帰ってこなければならなかった。ちゃんとしたレストランどころか街道沿いの軽食屋も閉っていて、アフターヌーン・ティーもままならなかった。かといって子供の遠足ではあるまいし、お弁当や飲物を用意してまで出掛ける気にはならない。

家内が病弱の母親の面倒をみるために一時帰国した時など、悲惨であった。日曜日はどのスーパーもあいていないし、土曜日もゆっくり寝ていると、店は閉ってしまう。木曜日だけは9時頃まであいているのだが、それを逃すと大変である。いくら仕事が好調に進んでいても、4時半にはそわそわしなければ、その日食べるものの手当ても出来ないことがあった。大抵の店は5時半か6時にはしまってしまうからである。

私が外国の大学に来て一番調子が上るのは、みんなが帰って周りのざわめきが静まった5時から7時くらいの間である。昼間助手の院生に計算してもらった結果や集計してもらった資料を検討し、翌日やってもらうことを考える、あるいは翌朝セクレタリーにタイプしてもらう簡単なdiscussion memoを書く。ところが「明朝のパンがない」とか「今晚のむビールが切れていた」となると、現地の人同様5時きっかりに大学をあとしなければならぬのである。

94年にオークランドに戻って来た時は、さすが大都会だけあって夕方もある店があったように覚えている（その程度で、余り強い印象ではない）。ところが今回オークランドを訪

ね、また北島の南端のウェリントン迄都合2回ドライブして強烈に感じたのは、どこにいても「オープン・セブン・ディズ（日曜休日なし）」のサインが矢鱈に目に付いたことである。かつてマッシー大学にいた頃、主にコンサートをきくため、週末泊りがけで首都ウェリントンにいったものである。田舎の大学町のパーマストーン・ノースにはない素適な品がショーウインドーにあっても、月曜日の10時すぎ迄待たないと買うことはできなかった。観光客目当てのお土産品の店でもそうであった。しかし今回は随分と様子が変わっていた。土・日も、夕方も結構遅く迄やっている店が、スーパーだけでなく、多くなったのである。

聞くとところによると、商業などを規制する国の法律が緩和されたからと言う。そういえばこの国は、1975年迄（？）国の法律で“6 O'clock Close”なるものがあつたとのことである。パブでビールを出すのは6時迄という規定である。だから仕事を終えてパブに雪崩れこむ労働者達は、一ぺんに何杯かのグラスをオーダしないと安心できない。かつてマッシー大学で牛肉のことをやっていた関係で、食肉処理場の労働組合の幹部と連れ立ってパブにいったことがある。カウンターで3杯とってくれたので、ドリンと私の分と思い“Thank You”と言おうとすると、ドリンがあわてて「違う違う、あれは全部自分の分だ」と言ったのを思い出す。年配の労働者はその当時の癖がぬけないのである。

私は、商業規制の法律緩和以外に、労働組合の問題があるのではないかと考えている。かつて日本人の観光客の多い南島のクライストチャーチで土産品店を営んでいるある日本人が、「労働組合が強くて、夕方6時以降は何十%増し、土曜日はどう、日曜日は2倍で代休あり云々で、店を開こうにもなかなかできない。どの労働組合も全国組織で、地方の独自性を考慮せず一律にやられるので困ったものだ」のように言われたのを覚えている。

その後、国の規制緩和の動きとともに、労働組合の勢力が低下した、ないし地方分権化が進み全国一律のしびりが弱くなった。こうしたことが土・日の開店と夕方おそく迄の時間延長を容易にしたものと思われる。旅行者としては、結構なことだが、そこで働く労働者の立場からすると手離して喜んでばかりはいられない筈である。先に述べたが、このところニュー・ジラランド経済は好景気を続けているからいいようなものの、成長がとまる、あるいは下降にむかえば、労働組合の勢力低下は、労働者のみならず、経済全体に対しても好ましくない影響を与えるかもしれない。

スーパーが夕方遅く迄あけているのとあわせ意外だったのは、少くともオークランドでは、住宅地のスーパーには一寸した日本食コーナーがあり、握鮭やのり巻きが売られていることであつた。オークランドにどれくらい日本人の家族が住んでいるかはっきりしないが、1992年に邦人家族の食生活に関するアンケート調査をした時の記憶ではせいぜい100家族くらいのもので、それからうんと増えているようには思えない。よく観察した訳ではないが、それらの日本

食を買い求めているのは日本人ではなく、大半は現地のキューウィー\* 達のものである (\*ニュー・ジランド人の愛称で、軽蔑のトーンはない)。

アメリカではニューヨークやロスアンゼルスの大都市に高級な日本食のレストラン\*が多く、その顧客のかなりの割合は日本人の駐在員であるより、現地のアメリカ人達であるようにみえる (\*アクロバチックな鉄板焼きでなく、カウンターのにぎりや天ぷら中心)。私がいま本稿をしたためているニュー・メキシコ州の大学町ラス・クルーセスには、15年前には大した日本食のレストランはなかったが、現在は結構いい店があり、その顧客の大半は土地の人達である。こんな田舎町のアメリカ人も日本食を食べるようになったのである (私は、日本食が「高級」だと主張するつもりは毛頭ない。しかし刺身やカラッと揚げた天ぷらとおすましが、しつこい食事が続いたあと一抹の清涼剤であるのは確かであろう)。

ニュー・ジランドの人達も毎日、羊肉とチーズをいためた同じようなメニューでなく、たまにはさっぱりしたものを食べるようになったのである。それだけ彼等の世界がひらけ、またそれを可能にするように経済状態も良くなったとみて良いのかもしれない。マッシー大学で日本語と日本の歴史を教えておられる角林さんの奥様が家内に次のような事を言われたことがある。「子供の友達のお母さん達がうちへ見えて夕方なかなか帰ろうとしない。私は夕食の仕度に取りかからねばならずやきもきすることが多い。御主人に何を作るのときくと、“肉を焼いてあとは人参かじゃがいもをつけ合わせるだけだから15分もあれば出来るのよ”と」

私はきんぴら牛蒡と「日ノ丸弁当」で育った世代だから、心情的・信条的にもそういうものは劣悪なものという観念から自由になりきれない。しかし幼い孫達がただのり巻きや梅干を「おいしい、おいしい」と食べるのをみると、日本人の食生活も真に豊かになったのだなーと感じ入るこの頃である。

## 補稿「技術進歩における美と蓄積の比重」

### 1 ヨーロッパにおける蓄積の厚さ

われわれのヨーロッパ旅行の出発点となったローマに着いたのは1月18日の早朝であった。空港からローマ市内にむかうみちは、20年以上前にみたロッセリーニの「無防備都市」のなかにでてきた第2次大戦中の風物そのままであった。市内の古い町並、ホテルの“のんびりエレベーター”も、先進諸国に「新しさ」を求めて旅たってきたわれわれを、いさゝか失望させたと言ってよいだろう。

だが当日午後の市内遊覧、翌日のカラカラのFAO訪問のゆきかえりにみたローマは、少なくとも私には全く違った感銘を与えることになる。2000年に近い昔につくられたというコロシウム横の石畳の道路を、シトロエンのスポーツカーが疾走し、観光客をのせた大型バスが道路わきの溝に落ち込む心配もなく、ゆうゆうと走っている。

その夜、FAOのあるエコノミストにすばらしくうまいスパゲッティを御馳走になったが、大して名もないそのレストランの地下室は、あるじのいわくは何と2000年以上昔につくられたものであるとか。現在でも夏には多人数のパーティーにきわめて快適に利用されているようであった。

かように、幾百年以前にも作られた建造物が、現代の文明社会の日常生活のなかで、機能的にさしたる支障もなさそうにいきづいていた。これは私には驚異であった。

どこかの国のように国家的英知を集めてつくられた高速道路が、数年たらずして「低速道路」になり下がり、いまさら拡幅も重層化もかなわないというのとは大変な違いであるといわねばならない<sup>注(1)</sup>。

その後、スウェーデン、デンマーク、フランスをまわって、そのような感銘は一層強いものになった。たとえば南スウェーデンでたずねたD・ケネディー氏の農場の、御殿をおもわせる広大な邸宅に招じ入れられたときのことである。セントラル・ヒーティングなどを備えたモダンなつくり、「何年くらいたっているか」をきくと、「この部分は新しくつけ加えられたので、たった97年しかたっていないが、あとの部分は300年以上たっていると思う」という、氏の何気ないこの答えは、われわれの驚きをためいきに変えることになる。

道路にしろ、住居や畜舎などの建物にしろ、たゞ古いのが残っているだけでは、大して驚くにあたらない。とくに台風などの暴風雨が少なく、地震も少ないヨーロッパでは、石でつくってありさえすれば、建造物は半永久的に残るだろう。われわれの驚きはむしろ、恐らく人口は現在よりはるかに少なく、輸送手段もせいぜい馬車が主体であつたらう幾百年昔に<sup>注(2)</sup>、さらに重要なことは、経済的にも現在よりはるかに貧しかったその時代に、現在の巨大な交通量を

許容するあれだけの道幅とあれだけの舗装の固さをもった道路システムがつくられたという事実そのものである。ケネディ家の邸宅にしても、300年以上たっても床がきしまないというだけでなく、集中暖房にしる給湯システムにしる、近代的な諸設備があたかも建てられた当初からそこにあったかの如く、調和よく自然にはめこまれている。部屋そのものの構造にしる、床下あるいは天井裏にしる、余程のあそびがなければあのようにはいかないであろう。

小作人のかこくな搾取の上にしる、幾百年も以前によくもあれだけ余裕のある家が建てられたという事実そのものがわれわれのためいきであった。

一度つくったものがこわれなければ、より重要なのは、時代の変化で簡単にこわさなくともよければ、個人の生活にしる、社会的にも蓄積はおのずと厚くなっていく。これがわれわれが圧倒されたヨーロッパにおける蓄積の厚さの意味であった。

## 2 英国人(≒日本人)の物の考え方と技術進歩

英国人は一般に自分たちのくにをヨーロッパの一部とは考えていないようである。1月28日レディング(Reading)の国立酪農研究所(National Institute for Research in Dairy)に飼養の専門家ピーター・クロフ氏(P. Clough)をたずねたときである。氏は、“ヨーロッパ”の「100年先に女王のお邸に改造することもできそうな」畜舎を、「みるめには美しくとも全く利用価値なし」あるいは「こわすにさえ金がかかる」と大いに皮肉り、「建物は利潤をうまない、利潤をうむのは牛である」「それだけの金があれば牛をふやすべき」と強く主張する。従って研究所の畜舎はバラックの簡単なつくりで、「これだけのすき間があれば、ヨーロッパの畜舎のように強制換気装置の必要もない」とわらった。

これはきわめて「日本的」ではないか。浅学にもヨーロッパを代表すると(私が)思っていた英国人の考え方が、日本人に近いのを発見したのは意外であった。その時私の頭には、ターラップ社(Taarup)の案内でおとずれたオーデンセ郊外(デンマーク)の牧場の、“王宮”とまではいかなくとも、その“下男屋敷”よりは余程立派な乳牛舎があった。

「建物は利潤をうまない」—美しい建物に投じた余分な金はコストを上げるだけであるとしても、私が泊まったロンドンのホテルの朝食に出されたバターの製造元から判断する限り、英国はデンマークからかなりの乳製品を輸入しているではないか。かりにそこには、輸出補助金のようなかなり人為的な制度があるにせよ、英国自身も国内産牛乳のバターなどの加工むけ価格を、飲用乳のそのほとんど1/3水準に据え置いているというよりむしろ据え置かざるをえないことを考えれば<sup>(注3)</sup>、どちらの方がより低コストであるのかの答えははっきりしていると言わざるをえないであろう。

クロフ氏が“beautiful but useless”と言ったとき、私の頭に去来していたものは、傷

みやすい野菜や果物を雑然と戸板の上にならべ、「陽ざらし」「風ざらし」のままにしている青果小売商に代表されるわが国の食料品小売商の店頭と、ストックホルム郊外のニュータウン、シャーホルメ（Shaiholmen）でみた夜通しあかりをつけた広々とした美しい生協経営のスーパー・マーケットの店内であった。

客あしが変わらない限り、広い美しいスペースは、それだけコストを押し上げる。だがそのような固定投資は、販売経費のなかで必ずしも大きなウェイトを占めない。とくに商品の回転が良くなる程、単位当たりマージンに占める比重は小さくなる。それにくらべれば「陽ざらし」など乱暴な品扱いによるくされや減耗は意外に大きく、よくわが国の青果小売店関係者が言うように「2倍に値付けしても1/3は品傷みで売れないから、正味のマージンは3割がいゝとこ」ということになりかねない。

風ざらしの店舗で、ほとんど固定投資らしい投資をせずに売っているわが国の青果小売商が、北欧やアメリカのぜいたくで「美しい」小売店に比べ、決して値幅が小さくないのは（私にはそう思われる）、そういうところに理由があるのであろう。

いわば戸板の上で、お安く商売していたのでは、科学的な商品管理・在庫管理の技術はなかなか生まれてこない。また売上げの拡大策も、「買った、買った！ 奥さん安いよ」以上には出にくく、消費者行動理論に基く科学的な販売促進技術は容易に発達しないであろう。事実わが国のその分野における技術・ノウハウは、ほとんど輸入されたものといって差支えない。

これは畜産についてもその儘妥当する。牛が唯一の“profit generator”であるとして、やたらと牛の数をふやせば、牛の飼養管理は手薄にならざるをえない。手をぬいて調整された飼料を、たとえば個々の牛の能力や必要にかまわず画一的に与えるとか、食いたいだけ食わせるといったことになりやすい。それがまさに英国でみた乳牛の飼い方であり、帰国後たまたま訪問した九州のある大規模牧場のやり方であった。

本報告の他の部分でもふれられているように、牛の能力特性、産後や受胎後の期間などに応じて、与える飼料の質や量をかえることの経営上の利益は、最近のOECDとスウェーデンの協同研究によると<sup>注(4)</sup>、一般の予想をはるかにこえるものであるらしい。英国やアメリカ（本節の趣旨に関連していえば、アメリカはきわめて「英国的」である）では、搾乳牛と産直前の非搾乳牛に2分するのがせいぜいであり、またそのような研究に対するニーズも余り大きくないが、上記の研究によると、産後の期間による区分飼養を1ヶ月きざみから1週間きざみにすることで、1搾乳牛期間当たり約50スウェーデンクローンに相当するプラスがえられるというのである<sup>注(5)</sup>。

ここでの問題は、そのための小群区分管理を能率よく遂行するための労働節約的機械化システムを開発することである。これこそが技術発達の方角であろう。

「戸板の上での商売」では、往々にして商品・在庫管理がずさんになるように、屋根と柱だけの粗末な畜舎で牛を飼っていたのでは、飼料の与え方は、とくに粗飼料は購入濃厚飼料とちがいほとんど直接費がかかっていないだけに、ずさんなものになりやすい。日本の場合など、まったく敷藁と同じような形で草が与えられていることがある。牛の胃を通そうと、そのままふみつけられてきゆう肥になろうと、かまわないといった態度である。

しかし、たとえ牛に反すう胃があるにせよ、牛にとっての草は、人間の場合の野菜と全く同じで、きわめて価値の変化しやしいものである。同じきゃべつでもうまく結球していないきゃべつや、トウのたちかけたきゃべつは、可食性や栄養面で著しく劣るように、同じ牧草でも、可消化性や栄養価の面で刈りとりの適期はきびしく限られるであろう。収穫後の栄養価の変化も、恐らく生鮮野菜の場合と同じデリケートさをもっているに違いない。それを「敷藁と同じように」扱ったのでは、自然から植物体に注入された潜在的な栄養価の半分以上、上記の九州の牧場の場合など私の簡単な試算では、恐らく80%程度が無駄にされているように思われる。

### 3 「意志決定における美」と蓄積と技術進歩

ヨーロッパと日本、あるいはヨーロッパと英国の比較で私が言いたかったことはこうである。小さなケチは小さな節約に終り、大きな節約を可能にする技術開発につながらない。そういう意味では、長い眼でみれば、小さな合理は、しばしば大きな無駄である。

旅程の最後におとずれたハワイでのエピソードは、そういう意味で、まさにショッキングなまでに印象的であった。

ハワイの道路は、恐らく地勢上からであろう、狭くてかなりいりくんでいる。また急激な観光ブームも手伝って、たえず補修・拡幅・新設が行われている。島内のあちらこちらで、掘り起こしがたえない。それに基く交通渋滞が深刻である。

アメリカの軍人に嫁いだ知り合いの日本人婦人がこうだったのである。「私は主人についてアメリカのあちらこちらを廻ってきたが、ハワイくらい道の悪いところはほかにない。ここだけこんなに悪いのは、ハワイは昔から日本人が沢山すんで、つくったところだからでしょう」と。

古さの生きているローマの町に感銘した私に、FAOのS. Kawatatsu博士はこう言ったものである。「都市計画の基準は算術ではない。美でなければならない」、さもなければすぐ陳腐化し、つくってはこわしを繰り返さなければならない。「ヨーロッパの蓄積は単に石と木の差ではない」と。恐らく博士の発言はその儘、農業にも当てはまるように思われる。「意志決定の基準は算術でなく美に求められねばならない。」さもなければ蓄積も残らず、技術も進歩していかない。

- 注 (1) 「パンク寸前 首都高速」『朝日新聞』都内版昭和46年3月30日朝刊。
- 注 (2) かつてローマ帝国はなやかなりし頃、戦争には象やタンクまでが動員されたといわれるが。
- 注 (3) (英国) Milk Marketing Boardなどのきょとり、あるいは柴田周蔵「ゆれ動く欧米農業をみて」『農業問題』4巻11号など。
- 注 (4) C. O. Claesson (Dept. of Animal Husbandry, Agriculture University of Sweden),  
“Improving the Competitive Ability of the Dairy Cow by Optimizing of Feeding and  
Management,” June 8, 1970, Internal DE LAVAL Conference.
- 注 (5) Ibid, pp. 5～6.

『国土総合開発研究調査—新しい農業の技術と経営に関する研究開発』経済企画協会、1971年3月より  
抜粋。

#### 〈編集後記〉

今月号は、森研究参与のエッセイです。オークランドの停電を長引かせたのは、森さんによると、「ニュー・ジランド人そのもの、ないしその生き方によるのではないか」(p.9)とのこと。一つの見方として貴重です。最近日本では、庭造りにかけるニュー・ジランドの人たちの情熱や、溜息なのでそうなほどに見事な彼らの庭が、雑誌などでたびたび紹介されています。聞くとところによると、彼らは庭造りに際して、成木ではなく、わざわざ幼木を植え、その成長過程を楽しむとともに、幼木の成長にあわせて、庭全体をアレンジし直すそうです。50～60年もかけて、一つの庭を造るのですね。そういうニュー・ジランドの人たちには、たしかに効率性の観念に欠けたところがあるのかもしれませんが。

編集子 S

---

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 古川 純

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561

---